

## Ⅱ 中国の朱子学

- 人間は天地自然の一部である。天地自然は、太極という統一体が陰陽五行となって無限に生成して変化する過程である。現象として知覚できる物質世界、すなわち「氣(形氣)」には、然る所以(ゆえん)の故(こ。理由)と、当(まさ)に然るべき所の則(そく。当為)がある。これを「理」と呼ぶ。
- 一理が人間に分与されて、「性」となる。「性」は仁義礼智信であり、「性」は絶対的に善である。人間は善なる「性」を持っていないことは決してなく、人間が「性」に従わないことは「自暴自棄」であり、「下愚」と呼ぶ。
- 氣は陰陽五行の配分で個物を作る。人間にとっては身体である。
- 「性」が氣に触れると、「情」となる。情は善の感情を生むが、その過不足から人欲が生じる。
- 聖人君子と小人夷狄を隔てるものは、「性」に循(したが)い人欲を去り、「情」を中庸にコントロールできるか否かである。すべての人間は学んで聖人君子となれる可能性がある。学ばなければ情は忿懣(ふんち。怒り)・恐懼・好楽・憂患に流れ、人欲に捉われるままで小人夷狄から抜け出せない。
- 「性」に従い人欲を去る方法は、居敬存養と格物窮理。意識以前の「未発」の心を養い修め、「已発」された意識で内なる理(仁義礼智信)と外物の理 (vs人間、社会、自然)が一致して疑いがなくなる点に至るまで正解を考え尽くす。
- 以上の「道」を歴史開闢以来教えとして伝えているのが、「中華」である。邪説とは「道」に外れる教説であり、夷狄とは「道」を知らず教化が行き届かない半人間の住む地域である。

太極・陰陽五行論  
理氣二元論

性即理、性善

心は性情を統ぶ

人欲を去り天理に循う

居敬存養と格物窮理

道統、華夷の別

## Ⅱ 中国の朱子学

□ 人間は天地自然の一部である。天地自然は、太極という統一体が陰陽五行となって無限に生成して変化する過程である。現象として知覚できる物質世界、すなわち「気(形気)」には、然る所以(ゆえん)の故(こ。理由)と、当(まさ)に然るべき所の則(そく。当為)がある。これを「理」と呼ぶ。

太極・陰陽五行論  
理気二元論

### 世界の存在構造

□ 一理が人間に分与されて、「性」となる。「性」は仁義礼智信であり、「性」は絶対的に善である。人間は善なる「性」を持っていないことは決してなく、人間が「性」に従わないことは「自暴自棄」であり、「下愚」と呼ぶ。

性即理、性善

### 人間の(本来的)善と平等

□ 気は陰陽五行の配分で個物を作る。人間にとっては身体である。

□ 「性」が気に触れると、「情」となる。情は善の感情を生むが、その過不足から人欲が生じる。

### 悪の起源論

心は性情を統ぶ

□ 聖人君子と小人夷狄を隔てるものは、「性」に循(したが)い人欲を去り、「情」を中庸にコントロールできるか否かである。すべての人間は学んで聖人君子となれる可能性がある。学ばなければ情は忿懣(ふんち。怒り)・恐懼・好楽・憂患に流れ、人欲に捉われるままで小人夷狄から抜け出せない。

人欲を去り天理に循う

### 悪から善へ移る義務、メリットと責務のリンク

□ 「性」に従い人欲を去る方法は、居敬存養と格物窮理。意識以前の「未発」の心を養い修め、「已発」された意識で内なる理(仁義礼智信)と外物の理 (vs人間、社会、自然)が一致して疑いがなくなる点に至るまで正解を考え尽くす。

居敬存養と格物窮理

### 精神の修養＋ 世界と自己の関係の熟慮

□ 以上の「道」を歴史開闢以来教えとして伝えているのが、「中華」である。邪説とは「道」に外れる教説であり、夷狄とは「道」を知らず教化が行き届かない半人間の住む地域である。

道統、華夷の別

### 自文化の絶対正義

## Ⅱ 中国の朱子学

漢代

五経・論語が編集される  
訓詁学(古注)

五経

楽経(散逸?)

詩(詩経)

書(書経) 今文尚書・  
古文尚書 現在伝わる古文尚書は偽書

礼(礼記) 周礼・儀礼

易(周易) + 十翼

春秋 + 穀梁伝・公羊伝・左氏伝

論語・孟子・荀子

古注  
(漢~魏晋)

鄭玄  
趙岐  
王弼  
杜預  
etc

唐代

韓愈が道統論を打ち出す

五経正義

中庸  
大学

韓愈『原道』

- 大学の八条目を引用
- 孟子を道統に加える
- 荀子を道統から外す

宋代

四書五経の評価が確定  
朱子学(新注)

四書

大学  
中庸  
論語  
孟子

新注

(四書集注、南宋)

朱熹

詩集伝(詩)・周易本義(易)・資治通鑑綱目(歴史)・  
文公家礼(祭礼)・書経集伝(書、弟子蔡沈の作)

Ⅱ 中国の朱子学

周張二程(近思録)

周敦頤(廉溪)

太極図説

1017-1073

師弟

程顥(明道)・程頤(伊川)

1032-1085

師弟

1033-1107

程子遺書・程子外書

楊時(龜山)

1053-1135

師弟

羅從彦(豫章)

1072-1135

師弟

朱松(韋齋)

1097-1143

親子

李侗(延平)

1093-1163

師弟

朱熹(朱子)

1130-1200

司馬光 資治通鑑  
邵雍(邵康節)

兄弟の父  
程珦の  
いとこ

張載(横渠)

1020-1077

西銘

湖南(張南軒)  
浙江(呂東萊)  
江西(陸九齡・象山)

北宋(華北)

科挙制度の完成  
活版印刷の発明

1126靖康の変

南宋(福建)

(建州崇安)

胡籍溪・劉白水・劉屏山

父の死後三人に師事  
劉白水の娘と結婚  
劉屏山から禪の影響

(大学或問より)

間(このごろ)獨り惟れ念う、昔延平先生の教を聞きて、以爲(おもえら)く學を爲るの初め、且つ當に此の心を常存すべし、他事の爲に勝た所(さ)るること勿れ、凡そ一事に遇わば、即ち當に且つ此の事に就て反復推尋して、以て其の理を究むべし、此の一事融釋(ゆうしゃく)脱落するを待ちて、然して後に序に循いて少しき進みて別に一事を窮む、此の如くすること既に久しく、積累することの多くして、胸中自ら當に洒然(しゃぜん)たる處有るべし、文字言語の及ぶ所に非ず、詳に此の言を味に、其の規模の大、條理の密、程子に逮ばざるが若しと雖も、然も其の工夫の漸次、意味の深切は、則ち他説の能く及ぶ所に非ざる者有り、惟だ嘗て實に力を此に用いる者、能く以て之を識ること有りと爲す、未だ以て口舌を争い易からず。

李延平の学問：体認・融釋・洒落

### 朱子の三人の同時代人

しょく

#### 張栻(南軒) 1133-1180

父は南宋の宰相、張浚。高名な道学者の胡五峯に学ぶ。朱子が職務により都の臨安にいるとき、張南軒と知り合う。三十代の朱子は、張南軒が師の胡五峯から受け継いだ察識端倪説に触れて、亡き師李延平の静坐涵養の法に欠けている行動哲学に惹かれて思想的に動揺したという。後に朱子は張南軒の思想を克服して四十代に「定論」となったという。朱子は張南軒の郷里湖南長沙に遊び、名峰南岳衡山に共に登山して互いに詩を贈答した。

#### 呂祖謙(東萊) 1137-1181

呂氏は宋代の名門で、祖先に三人の宰相と多数の儒者を輩出した。呂東萊は父の任官に従って福州に滞在した二十歳前後のころ、すでに任官して福州に出向していた朱子と出会ったという。その二十年後に朱子は呂東萊を招いて十日間起居を共にし、『近思録』を共同編集した。呂東萊の学問は折衷派で、朱子の学と陸兄弟の学を調停しようと「鵝湖の会」を開催した。朱子の東萊への信頼は深く、長男の朱塾(しゅじゅく)を約250km離れた浙江金華の呂氏の郷里に送り、東萊に息子の勉学を依頼した。

#### 陸九淵(象山) 1139-1193

陸氏は唐末の宰相陸希聲から下る旧家で、宋代には江西金谿に一族が集まって住む大家族であった。陸氏の三兄弟(九韶・九齡・九淵)はいずれも儒者として名を挙げて、とりわけ九齡・九淵(象山)の兄弟は「鵝湖の会」で朱子と衝突して険悪な会見となったという。陸象山は朱子の学を「支離(しり。煩雑でばらばら)」と批判して、自らの学を「易簡(いかん。簡単でわかりやすい)」と自賛した。陸象山の「心即理」説は明代に王陽明によって再顕彰されて、陸王心学(陽明学)が形成されていく。

朱子が江西南康軍の知事を拝命した時代、陸象山が当地を訪問してきた。朱子は、自らが復興した廬山白鹿洞書院で学徒に向けて一話を頂きたいと依頼した。象山は快諾して書院で講義を行い、聴衆に感銘を与えたという。朱・陸は互いの思想において厳しい批判を与える論敵であったが、それぞれが高い学識を持つ学界の指導者であることは認め合い、終生尊敬の念を失わなかった。

主要な理論的テキスト

自然観

太極・陰陽五行論  
理気二元論

然る所以の故  
四季は繰り返し、生命は生死して種族は継承する

存在論

実践論

心の構造

本然の性(体)と氣質の性(用)  
未発の性(体)と已発の性(用)



万物(マクロコスモス)の中の  
人間存在(ミクロコスモス)

易経  
太極図説

大学  
中庸

心の構造の理解から  
修養の実践へ



人間観

性即理、天理が人間にあって善性となる  
人間は気の最も清正なる存在、万物の霊長  
人間は天地に参する存在(三才)

- 馬(気)を御する人(理)のたとえ(朱子)
- 電車(気)が走るレール(理)のたとえ(土田健次郎)
- 気は自己で物理運動を行う
- 理は運動をしない、秩序が反復して同一性に回帰することを保証する、自然と社会の見えざる原理
- 理はアイデアともエイドスとも違う(安田二郎)

当に然るべき所の則  
人間は代々変わり、人間と社会の法則は変わらない

修養法

中庸・中和(発して節に中る)  
居敬の姿勢を存養する  
格物窮理して内外一致させる

### 朱子学の気(氣)観

○気は天地の間に隙間なく充満していて、集まりかつ散じる運動を無限に繰り返す。(朱子学をはじめとする中国思想の存在論は原子論ではない。空間全体に薄くまたは厚く「気」が充満して生成変化消散する。)

伊藤仁斎「箱の蓋を密閉するとやがてカビが生えて虫が湧く。これは空間に見えない生氣が充満しているからである。」

○個物は陰陽五行の配当の違いによって生じる。

○集まる気には清濁正偏の差があり、序列がある。(非生物・生物・人間の連続性と序列性。夷狄・小人と中華・君子・聖賢との序列性。)

非生物<禽獣虫魚(仁義礼智信の徳を部分的に発揮する)<人間(最も秀霊なる気の集まり。仁義礼智信の徳を完全に発揮できる能力が与えられている)

夷狄・小人(人間の中で禽獣に近い。気質の性にとられ自己の内なる天理に従わない)<君子<聖賢(最も天理に従う者)

(参考)キリスト教の人間観「神の似姿である人間は動物と明確に区別されて、人間同士は本質的に平等である」

○人間は死ぬと肉体の気は消散して、魂(陽気)は神主(しんしゅ。位牌)に移り、魄(陰気)は地中に散っていく。魂魄はきわめて薄い気で見ること触れることもできないが、子孫が祭祀することによって感じる事ができる。祭祀とは、依り代である神主に祖先の魂を凝集して招魂し、子孫が血統の継承を報告し、祖先の魂を慰める儀式である。(祖先祭祀の意義の気論による説明)



## ① 居敬・存養

学ぶための姿勢づくり、心が外物を正しく映して騒がぬ明鏡止水を養う。意識以前の工夫

小学で始めるべきこと・放心を収めて徳性を養う・心の「未発」を存養する。  
自己の内にある仁義礼智信の善性に「敬」を持ち「誠」であり続ける。学問の始まりから終わりまで続ける。  
心の四面に隙を残さず集中する。日常的に静かな心を養う工夫をする。

主一無適、常惺惺、静坐

止観無念の座禅は不可

## 朱子学の二つの修養法

## ② 格物・窮理

外物と自己のあるべき関係を体認融釋洒落できるまで考え抜く。意識発生後の工夫

大学で始めるべきこと・外物の事物一つ一つの「当然の則」がどこにあるかを認識し、己の仁義礼智信の善性が「已発」して節に中(あ)たる点を窮め尽くす

念慮、読書、講論

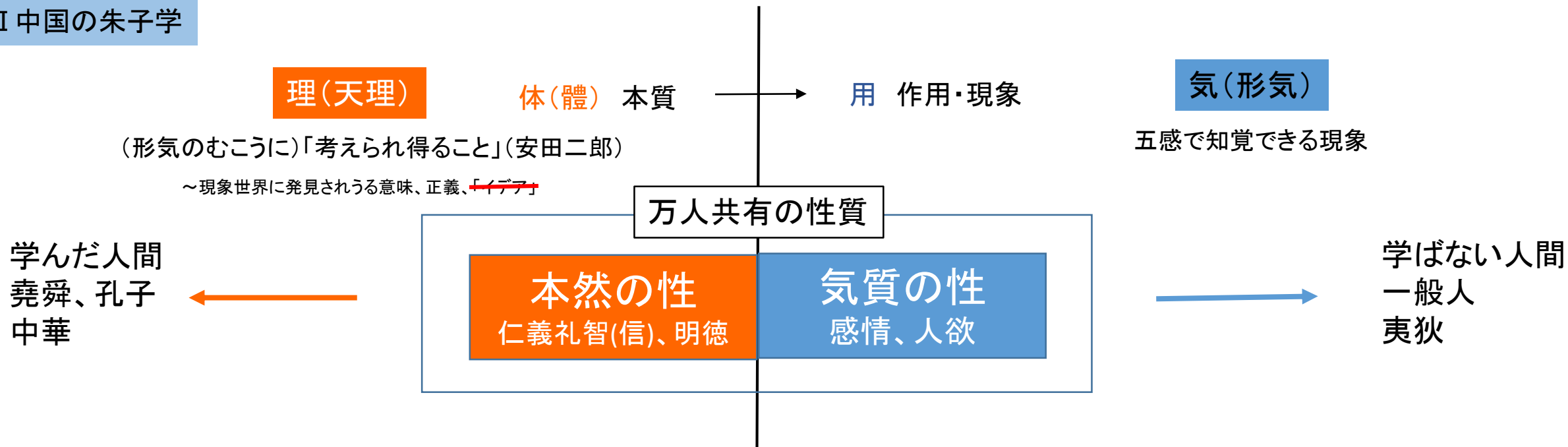
「玩物喪志」は不可

① 自己の健全なメンタリティの保持＋② 自己の社会的当為の熟考

仏・道は②が欠けている。(社会的当為の軽視)

西洋倫理学は①の考察を避ける。(ロゴスの自己完結の重視・ロゴス以前の身体性の軽視)

## Ⅱ 中国の朱子学



伊川の「性は即ち理なり」、横渠の「心は性情を統ぶ」の二句は、顛撲(てんぼく)破れず。(朱子語類)

### 性即理

万物は「気(形気)」と「理」から成る。(気は馬で、理は馬に乗る人。走る運動は馬が行い、走る方向は人が御して定める。) 理が個物に内在すると、それは「性」となる。人間の「性」は善であり、人間が「性」を捉えてその命ずるままに生きることを目指すことが、学んで聖人に至る道である。

### 心統性情

人間の心は「性」(本然の性)と「情」(氣質の性)の二面から成る。「性」とは、心の本質である(体)。「情」とは、心の外物への反応である(用)。「情」からは惻隠羞惡・辞讓是非といった善の端(はじまり)が生じうるが、それは行き過ぎると激情となりかねない。さらに悪いことには、「情」からは人欲物欲といった悪しき感情も生じうる。「情」は、このように危うい存在である。学ぶ者は心を修養して体である本然の「性」に従う努力を不断に行い、用である「情」をよく善導制御して人欲物欲から離れなければいけない。

### 朱子学の歴史論

- 朱子は五経の『春秋(左氏伝)』に注を与えていない。朱子は歴史研究よりも経書の読書を重視。
- 司馬光『資治通鑑』(戦国～五代の通史)に歴史批評を与えたのが『資治通鑑綱目』。朱子の自著は冒頭の凡例と年代記の綱(主論)のみで、目(詳論)は弟子の著と伝わる。
- 凡例によると、朱子の「**正統**」とは**周・秦・漢(蜀漢含む)・晋・隋・唐**。それぞれの正統の間には「**無統**」の期間がある(最後の無統は五代)。皇位を篡奪したが皇統を継がせずに終わった者は「**篡賊**」である(漢呂后、王莽、唐武則天等)。正統王朝の継続中に皇位を篡奪・一地方で皇帝を僭称した国は「**僭国**」である。
- 天子の制を完備して天下全体を保有し、天子の位を少なくとも一度皇太子に継がせたら以降は「**正統**」な王朝とみなす。蜀漢は劉氏漢王朝の継続とみなし、曹魏は「**僭国**」に落とす。**東周・蜀漢・東晋**のように地方支配に落ちても、同姓が継承して天子の制を立てたならば正統王朝の継続時代とみなす。中国史は正統王朝の王・皇帝の在位年と元号によって記載されなければならない。三国時代について『通鑑』原書は魏を正統として書かれたが、通鑑綱目は蜀漢を正統として書き換える。
- ここから(必ずしも朱子の意図ではないが)、各時代の「**正統**」王朝の天子に(どんなに衰えたとしても)忠孝を尽くす者を**忠臣孝子**とする考えが生まれた。諸葛孔明は忠臣であり、曹操は逆臣という史観である。しかしこれより**湯武放伐**は是か非か、**武王と伯夷**のどちらに正義があるのか、という大問題が朱子学に生じた。
- 義をもって時の悪政に挙兵する者(秦二世皇帝期の旧六国、王莽期の光武帝の兄劉縯など)は**起兵**と呼ばれ、兵起(不義であるが起兵の者とともに挙兵した者)・盗賊(不義不時の暴乱)とは区別される。
- 朱子は周秦、秦漢、(蜀)漢から(統一)晋、(東)晋から隋、隋唐、唐宋の間に「**無統**」時期があるとみなす。無統の時期は、正統な王朝史が書けない抗争時代と規定する。これによって、**秦の始皇帝・漢の劉邦・晋の司馬炎・唐の李淵**は(かなり強引であるが)逆臣とはいえない、とみなされる。すなわち「**宋の建国は後周からの篡奪でなく、南宋は正統で金は僭国**」とみなすのが朱子の言外の意図である(後周王朝は三代継承されたが、全国統一はできなかった。)
- 明の**方孝孺**は朱子の正統観に異を唱え、倫理的正義を加味した正統観を唱えた。方孝孺による正統は、夏・殷・周・漢・唐・宋。晋は、天下の取り方が正義でない。秦・隋は、天下の維持に仁義がない。夷狄の皇帝は正統でない(方孝孺は隋・唐を漢族王朝とみなす)。
- **閻齋学(崎門)**は朱子学の正統論を日本に適用した。すなわち日本で唯一の「**正統**」である天皇家の天子に(どんなに衰えたとしても)忠孝を尽くす者を忠臣孝子として、逆らう者を逆賊とする。閻齋学の正統論は同じく朱子学に基づく**水戸学**が継承して、**楠正成を忠臣として北條・足利を逆賊とする歴史観**に結実した。
- 朱子学は女真・蒙古の王朝を認められないという時事的課題から思想に民族優劣論を持ち込んでしまった。朝鮮・日本の朱子学はこの矛盾を批判して、朱子学の原理に従っているかどうかで華夷を区別して小中華論(李氏朝鮮)・日本中華論(日本、閻齋学・水戸学→皇国史観)となった。

孔明の面は淡紅を潮している。言語は徐々、痛烈になってきた。虞翻が口を閉じると、すぐまた、一人立った。淮陰の歩騭、字は子山である。

「孔明——」こう傲然呼びかけて、「敢て訊くが、其許は蘇秦、張儀の詭弁を学んで、三寸不爛の舌をふるい、この国へ遊説しにやつてきたのか。それが目的であるか」

孔明は、にこかえりみて、

「ご辺は蘇秦、張儀を、ただ弁舌の人とのみ心得ておられるか。蘇秦は六国の印をおび、張儀は二度まで秦の宰相たりし人、みな社稷を扶け、天下の経営に当った人物です。さるを、曹操の宣伝や威嚇に乗ぜられて、たちまち主君に降服をすすめるような自己の小才をもって推しはかり、蘇秦、張儀の類などと軽々しく口にするはまことに小人の雑言で、真面目にお答えする価値もない」

一蹴に云い退けられて、歩騭が顔を赤らめてしまうと、

「曹操とは、何者か？」と、唐突に問う者があった。

孔明は、問髪をいれず、

「漢室の賊臣」と、答えた。

すると、質問した沛郡の薛綜は、その解釈が根本的な誤謬であると指摘して、

「古人の言にも——天下は一人の天下に非ず、すなわち天下の天下である——といっておる。ゆえに、堯も天下を舜に譲り、舜は天下を禹に譲っている。いま漢室の政命尽き、曹操の実力は天下の三分の二を占むるにいたり、民心も彼に帰せんとしておる。賊といわば、舜も賊、禹も賊、

武王、秦王、高祖ごとく賊ではないか」

「お黙りなさい！」

孔明は、叱っている。孔明は、父母もなく君もない人間でなければいけないことだ。人と生れながら、忠孝の本「ご辺の言は、父母もなく君もない人間でなければいけないことだ。人と生れながら、忠孝の本をわきまえぬはずはあるまい。曹操は相国曹参の後胤で、累世四百年も漢室に仕えてその禄を食みながら、いま漢室の衰えるを見るや、その恩を報ぜんとせず、かえって、乱世の奸雄たる本質をあらわして篡虐をたくらむ。——思うにご辺は天數循環の歴史を、現実の一人間の野望に附加して、強いて理由づけようとしておられるらしい。そういうお考え方もまた逆心といえる。借問す、貴下は、貴下の主家が衰えたら、曹操のように、たちまち主君の孫権をないがしろになされるか」

舌 五

呉郡の陸績、字は公紀。

すぐ続いて、孔明へ論じかけた。

「いかにも、先生のいわるる通り、曹操は相国曹参の後胤、漢朝累代の臣たること、まちがいない。——しかし劉予州は如何に。これは自称して、中山靖王の末裔とはいい給えど、聞説、その生い立ち、蕭を織り履を商うていた賤夫という。——これを較ぶるに、いずれを珠とし、いずれを瓦とするや。おのずから明白ではあるまいか」

71 孔明は、呵々大笑して、

『三国志演義』原文より

歩騭黙然無語。忽一人問曰：「孔明以操何如人也。」孔明視其人，乃薛綜也。孔明答曰：「曹操乃漢賊也，又何必問？」綜曰：「公言差矣。漢歷傳至今，天數將終。今曹公已有天下三分之二，人皆歸心。劉豫州不識天時，強欲與爭，正如以卵擊石，安得不敗乎？」孔明厲聲曰：「薛敬文安得出此無父無君之言乎！夫人生天地間，以忠孝為立身之本。公既為漢臣，則見有不臣之人，當誓共戮之，臣之道也。今曹操祖宗叨食漢祿，不思報效，反懷篡逆之心，天下之所共憤。公乃以天數歸之，真無父無君之人也！不足與語！請勿復言！」

孔明の面は淡紅を潮している。言語は徐々、痛烈になってきた。虞翻が口を閉じると、すぐまた、一人立った。淮陰の歩騭、字は子山である。

「孔明——」こう傲然呼びかけて、「敢て訊くが、其許は蘇秦、張儀の詭弁を学んで、三寸不爛の舌をふるい、この国へ遊説しにやってきたのか。それが目的であるか」

孔明は、にこかえりみて、

「ご辺は蘇秦、張儀を、ただ弁舌の人とのみ心得ておられるか。蘇秦は六国の印をおび、張儀は二度まで秦の宰相たりし人、みな社稷を扶け、天下の経営に当った人物です。さるを、曹操の宣伝や威嚇に乗ぜられて、たちまち主君に降服をすすめるような自己の小才をもって推しはかり、蘇秦、張儀の類などと軽々しく口にするはまことに小人の雑言で、真面目にお答えする価値もない」

一蹴に云い退けられて、歩騭が顔を赤らめてしまうと、

「曹操とは、何者か？」と、唐突に問う者があった。

孔明は、問髪をいれず、

「漢室の賊臣」と、答えた。

すると、質問した沛郡の薛綜は、その解釈が根本的な誤謬であると指摘して、

「古人の言にも——天下は一人の天下に非ず、すなわち天下の天下である——といっておる。ゆえに、堯も天下を舜に譲り、舜は天下を禹に譲っている。いま漢室の政命尽き、曹操の実力は天下の三分の二を占むるにいたり、民心も彼に帰せんとしておる。賊といわば、舜も賊、禹も賊、

武王、秦王、高祖のごとく賊ではないか」

「お黙りなさい！」

孔明は、叱っている。孔明の言は、父母もなく君もない人間でなければいけないことだ。人と生れながら、忠孝の本をわきまえぬはずはあるまい。曹操は相国曹参の後胤で、累世四百年も漢室に仕えてその禄を食みながら、いま漢室の衰えるを見るや、その恩を報ぜんとせず、かえって、乱世の奸雄たる本質をあらわして篡虐をたくらむ。——思うにご辺は天數循環の歴史を、現実の一人間の野望に附加して、強いて理由づけようとしておられるらしい。そういうお考え方もまた逆心といえる。借問す、貴下は、貴下の主家が衰えたら、曹操のように、たちまち主君の孫権をないがしろになされるか」

舌

五

呉郡の陸績、字は公紀。

すぐ続いて、孔明へ論じかけた。

「いかにも、先生のいわれる通り、曹操は相国曹参の後胤、漢朝累代の臣たること、まちがいない。——しかし劉予州は如何に。これは自称して、中山靖王の末裔とはいい給えど、聞説、その生い立ち、蕭を織り履を商うていた賤夫という。——これを較ぶるに、いずれを珠とし、いずれを瓦とするや。おのずから明白ではあるまいか」

孔明は、呵々大笑して、

71

Aは、朱子本来の考えに近い。中国は一つの政権が統治することが《正統》。統治能力が衰えたならば家臣が支えることが第一の責務であるが、君臣と民の同意があれば禪譲は否定できず、また君主が悪政を行うならば放伐することはやむをえない。曹魏は僭国とされたが、《禪譲》を受けた司馬西晋は天下を統一したので朱子から正統とされた。朱子にとって《正統》は合法政権の意味を出ない。

Bは通俗的な考え、および方孝孺・日本朱子学の考え。方孝孺的には、正義をもって継承されなければ天下を統一しても《正統》とはいえない。日本は皇室が開国以来の《正統》として、歴史的奇跡により継続した。皇室を支える以外に、日本人の選択肢はない。

## 科挙と朱子学

士たる者、先ず科挙と読書の二つのうち、自分にとってどちらが軽くどちらが重いかを見極めなければいけない。もし読書に七分の志があり、科挙に三分ならば、まだ許せる。もし科挙が七分で読書が三分ならば、将来きっと科挙にすっかりやられてしまうだろう。 **一朱子語類**

経書を読もうとしないで、科挙用の文書ばかりを読んで、先々いったいどんな人物になろうとしているのか、言ってみなさい。何度も受験しても受からず、年をとってそんなふうにしよぼくれてしまい、田舎で浮き沈みを繰り返しているだけではないか。かりに科挙用の文書で役人になれたとしても、国のため民のため利を興し害を除くべく心を尽くして奉職することなどあるまい。いつもいつも心の中では出世することばかりを考えて、権力者におべっかをつかい、推挙されることだけを求めて、そのためならばどんなことでもやりかねまい。 **一朱子語類**

科挙を受けないことは大したことではないのに、今の人たちは科挙を受けないというとすぐに大騒ぎをする。 **一朱子語類**

科挙は浅からず人を煩わし、そのために志を奪われる人も多い。とはいえ、父母がいれば、「仰ぎては事（つか）え、俯しては育てる」とあるように、科挙に頼らざるを得ない。それ故、科挙のためにも励まなければならないのだ。しかし、実際のところ、科挙はひどく人の志を台無しにしてしまう。 **一朱子語類**

楊龜山(程子の弟子)「科挙を受けるのは、貧賤の出の者がやむをえず受験して進士となるのだ。他に進士となるすべがあるならば、科挙など受ける必要がどうしてあるだろうか？」

宋代は科挙を合格した進士の黄金時代と呼ばれる。ところが梅原郁氏の研究によれば、宋代には同時に**恩蔭の制**が広く行われていた。父祖がある程度以上の官位であれば、その親族を一定数官に任ずる(蔭補)することが認められていた。さらに官界の有力者の子弟であれば、蔭補された後に推薦によって科挙の受験なしで進士の称号を恩賜される道がかなり広く用意されていたという。朱子の友人の張南軒は科挙を受験せず、父の蔭補で官界入りして若くして要職を得た。同じ呂東萊は、父祖の致仕恩(定年退官の際に、その空き分として子孫を奏任すること)で将仕郎に叙せられたところから官界の道始めた。朱子と陸象山は科挙の合格者として記録が残されているが、彼らには宋朝で高位に昇った父祖がいなかった。

朱子の書院に集まった子弟たちは、親から科挙を受けて出世することを期待される寒門の出の者が多かったことであろう。彼らの科挙と学問とのジレンマにいかに対処すべきかは、朱子も悩んだことではなかろうか。朱子すらも長子の朱塾を呂東萊の下に留学させた後、息子が科挙を受験することを許しているのである(結果は二度受験して落第。朱子の三人の息子はいずれも父の蔭補で官となったという)。

「入則孝出則弟守先王之道」

(孟子、滕文公章句下)

「入則孝出則弟謹而信汎愛衆・・・」は論語學而篇。

「菽粟如水火」

(孟子、盡心章句上)



《八股文》

破題

承題

起講

入手

起股(對句)

中股(對句)

後股(對句)

束股(對句)

破題・承題は、受験者が出題の意味を簡潔に述べる部分。

起講以下は、出題の発言者である聖賢(孔子、孟子、子思、曾子など)になり替わって受験者が出題について論述する。

## 宋代の科挙

解試(州試)→省試→殿試

(王安石まで)

進士と諸科。詩賦、論策(論述文)、帖経(経典の穴埋め問題)、墨義(経典の続きを述べる)  
詩賦、論策が中心。帖経墨義は五経の暗記。

(王安石以降)

進士に一本化。詩賦を減らして経書・歴史・政治の論述が中心となる。帖経墨義は廃止。経書に孟子が加わる。

## 明清代の科挙

童試→国立学校→郷試→(挙人覆試)→会試→(会試覆試)→殿試

郷試は三日。四書3問詩題1問、五経5問、策題。四書は朱子注(四書集注)に従い解答、書は楷書、文体は八股文。

挙人覆試は清代から追加。四書1問、詩題1問。1等から3等までが北京の会試を受ける資格を得る。受験者の激増に対応した足切りが目的。

最後は北京で会試・会試覆試・殿試。

## 科挙の勉強機関

宋代:国・州・県レベルで**国立学校(国子監・太学・州学・県学)**がある。**書院**はいわば私立学校であり、禅林をモデルとして各地の山林に設立された。書院は規律を定めて、教師が儒学を生徒に教えた。朱子も有名な白鹿洞書院(江西)を再建した。書院は学問を探求する場であり科挙とは切り離されているのが本来の意義であったが、事実として書院からは多くの進士が輩出された。宋代は国立学校に入学せずとも科挙を受験できた。

明代以降:国立学校が整備されて、科挙の受験は国立学校在学(中間試験あり)が必要条件となった。そのために国立学校への入試である**童試**が追加された。こうして幼少時から受験のための勉強を与えることに、各家の父兄は血道を上げるようになった。

- 朱子は一九歳で最終試験に合格、三三〇人中の二七八位。同年の最年少合格者は一八歳、最年長合格者は六四歳。四五歳の陳氏は、七度目の受験での合格であった。
- 朱子は国立学校に入学せず、少年時代は父に、父の死後は三人の師に附いて学んだ。



論語「位無きことを患えず、立つ所以を患う。」

論語「君子、仁を去りて悪（いず）くにか名を成さん。君子は食を終うるの間も仁に違ふこと無し。」

孟子「君子に三つの樂（たのしみ）有り、而（しか）して天下に王たるは與（あずか）り存ぜず。父母俱（とも）に存し、兄弟故（こと）無きは一の樂なり。仰いで天に愧じず、俯して人に忤（は）じざるは二の樂なり。天下の英才を得て之を教育するは三の樂なり。君子に三つの樂有り、而して天下に王たるは與り存ぜず。」

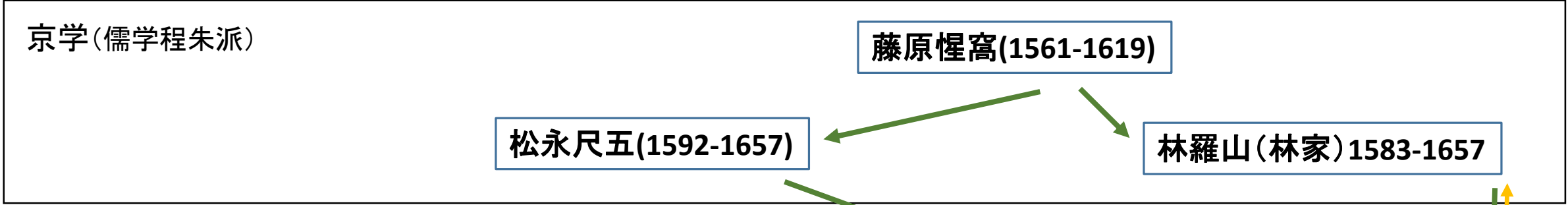
呂大臨（程子の弟子）「己の爲にする者は、心徳行に存して功名に意無し、人の爲にする者は、心功名に存して未だ徳行に及ばず、後世の若きは未だ人の爲にするに及ばずして、人其の私欲を濟（な）す者有り。」

学を志し、聖人に憧れる者は、己の為にのみ徳行を学んで功名のために勉強してはならない。科擧の勉強について朱子が下  
の下であると蔑むのは、功名のための勉強だからである。

士大夫は功名を蔑み、清貧な学者を尊重する。しかし官界で功名を挙げなければ政治を執って世界に己の信ずる理を実現させることはできない。ここにジレンマがある。朱子「孔子が今の時代に生きていたならば、科擧を受けていただろう。」李氏朝鮮では朱子学の理想像として清貧潔白なソンビ(선비)が尊敬された。Wikipedia「ソンビ」の項目を参照。

朱子学は名利を蔑み清貧を尊ぶ倫理観を広めることによって、社会の最優秀の階層が名利一辺倒に走らないように歯止めして社会の公正を維持する、思想的装置を提供したといえるのではないか。

『ホモ・サピエンス全史』によれば、人類は本能よりもフィクションを信じる能力を備えたことにより、本能的な利益より集団の物語＝フィクションのために団結することを可能とした。この能力によって、人類は最強の生物となった。いま己の利益を否定するフィクションを社会が信じなくなれば、社会は分裂して解体し、かえって人類は弱体化する。



土佐南学  
土佐独自の朱子学  
実践重視

九州

谷時中

雨森芳洲

貝原益軒

京都で当時の  
儒者と交流

佐藤直方・浅見綱斎・三宅尚斎

朱子学は道統を体認して実践する学ある  
のみであり、それ以外は不純不要である

朱子学の概念装置を批判、  
日用の人間関係の中に倫  
理を見いだすべし

仁斎学は日常のあいさつを  
倫理だなどと言っているだけ  
である

藤原惺窩(1561-1619)

松永尺五(1592-1657)

林羅山(林家)1583-1657

木下順庵(1621-1699)

木門十哲

新井白石・  
室鳩巢・  
三宅観瀾

山鹿素行

羅山に師事  
死後に朱子学  
批判に移る

京都

江戸

土佐南学派・崎門学

山崎闇斎(1619-1682)

古義学

伊藤仁斎(1627-1705)

中村惕斎(1629-1702)

古代の聖人の学は  
民を安んずる礼楽  
刑政の制定発布の  
みであり、道德倫  
理ではない

古文辞学

荻生徂徠

徂徠学は倫理をないがしろに  
して文芸博学に感嘆している  
儒学として許容しがたい

朱子学は古代思想を全く  
誤解している

本居宣長

大坂 懐徳堂

文献研究の方法で  
影響を受ける(宣長本人は否定)

昌平黌

→ 師弟関係

↔ 対立・批判関係

更張修正以行于世則區々深願  
斯得滿云。

元祿辛巳春分之日卒安仲欽書

*[Faint handwritten text in the background]*

四書示蒙句解卷一大學上

大學

中村惕齋

門下井閑祖略修正

大學章句序

大學十の此書ノ題号ナリ其義ハ經文ノハジメニア  
ラハス章句ハ註ノ異名ナリ詞ノキルヲ所ラ句ト云

語ノヲハル所ヲ章ト云一篇ノ章ト句トヲキリワケ其間ニ詞ヲ入テ文義ヲ  
トク故ニ註ヲ章句云ナリ序トハ書ノハジメニレルス詞序ハ緒ノ字ノ義ニ  
テイトダチナリ序ヲ見テ其書ノオモムキヲレルヲ繭ノイトクチヲトリテ  
クリ出スカ如クナレバナリ此序ハ朱子大學ノ章句ヲ作レル由來ヲ述ラレタリ

大學之書古之大學所以教人之法也

此

大學ノ書ノ大意ヲトケリ古トハ夏商周ノ三代ノ時ヲサス古ノ大學トハ太  
學ノ道ヲ一トス學宮ヲサス太學ノ道ヲレルレタル書ヲ大學ト名ツテ又其  
道ヲ教ヘ學フ處ヲモ太學ト云ソコニ  
テ人ヲ教ル所ノ法ノ即太學ノ道ナリ  
蓋自天降生民則既

組方  
見方

大學章句序上